

白 い 記 憶

～ 「死」を通して「生」を考える取組み～

(1) 主題名 生命の尊さ [3 - (2)]

(2) ねらい 「死」から生きることの意味を考え、自他の生命を尊重する心情を育てる。

(3) 資料名 「白い記憶」

(4) 授業の展開例

	学 習 活 動	主な発問と生徒の心の動き	留 意 点
導 入	1 これまでの体験を振り返る。	<p>あなたが「生きているなあ。」と実感するのはどんな時ですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・部活の試合でシュートを決めたとき ・嬉しいから ・好物を食べているとき ・おいしくて幸せだから。 	個々によって「生」を実感する場面は違うと思うが、合わせて理由も述べさせておく。
展 開	<p>2 資料の前半を読み、主人公の心情にそって考える。</p> <p>3 資料の後半を読み、主人公と共に「死」から「生きること」の価値を追求する。</p>	<p>初めて遺体を見たとき、主人公が身動き一つできなかったのは、どんな気持ちからだったのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・怖かったから ・どうしてよいのかわからなかった <p>死体が「何かの塊」のように見えたのはなぜだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・動かないから ・感情がないから <p>指輪のあとに気付いた主人公は、なぜ「何でだよ、何でなんだよ。」と心の中で叫びながら、苛立っていたのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手が生きていたときのことを考えなかったから ・実習中、技術が上達することしか頭になかったから <p>最後に黙祷を捧げ、お辞儀をしたのは、どんな気持ちからだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ありがとうございます。(感謝) ・安らかに眠ってください。(冥福を祈る気持ち) <p>「指輪のあと」に気付かなかっただら、主人公はどんな医者になっていたのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・技術や結果だけを重視する医者 ・患者の気持ちを考えない医者 	<p>漠然とした「死に対する恐れ」の感情を、主人公の気持ちになり想像してみる。</p> <p>「指輪のあと」が象徴的に意味していることについては生徒全員が理解できるように配慮する。</p> <p>最後の日、遺体に札をつけなかったことと合わせて考えると、多様な意見が出るだろう。 この物語には続きがあることを知らせて、範読する。 主人公の述懐を読み、再度、最後に黙祷を捧げ、お辞儀をした意味を考えさせてもよい。</p>
終 末	4 「生」と「死」をつなぐ『生き方』について考える。	教師自身の体験をふまえた説話を行う。	「心の元気」の告知をテーマとした「ぼくの気持ち」を視野に入れた終末を工夫する。

「白い記憶」

《前半》

あれは、僕が医大の二年生の秋だった。

一般教養や医学入門の講義がほぼ終了し、いよいよ人体解剖の実習が始まることになった。五、六人が一つのグループになって、三ヶ月かけて一体の人体を解剖していくのだ。医者を志す者として、いよいよ本格的な学習が始まることへの期待と、人体にメスを入れることへの不安が入り混じった気持ちで、その日を迎えた。

実習室に一步入ると、ひんやりとした空気と共に、消毒液の独特のにおいが漂っていた。ステンレスの解剖台の上には、すでにシートで覆われた死体が乗せられている。

人体番号五三二番。通常、このような人体解剖の協力者の情報は、いっさい僕たちには伝えられない。名前や年齢はもちろんのこと、死因や死亡時期でさえ知らされることはない。いわば、そこにあるのは、どのだれなのかわからない「死体」なのである。そして、僕たちはこれから三ヶ月、この「死体」とつきあっていくのだ。

初めに、僕たちは黙禱を捧げた。そしてそのあと、教授が死体にかぶせてあったシートを取り除いた。一瞬、息をのんだ。男性だった。年齢は四十歳前後であろうか。僕は、しばらくの間、その硬直した身体を不思議な気持ちで眺めていた。それまで身内の死を経験したことがなく、死んだ人間の姿を見るのは、その時が初めてだったからかもしれない。とにかく、死に対する畏れが、そのまま「死体」という形で横たわっているようで、僕は、身動き一つできなかった。

それから、教授の説明が始まり解剖の準備をすすめていくうちに、僕は、次第に平静を取り戻していった。当たり前なことだが、解剖台上の死体には、呼吸の気配も何も感じられない。体温もなく、反応を示すこともない。時間がたつにつれ、だんだんと、この死体が、微動だにしない何かの塊のように見えてくる。メスを執る今となっては、どのだれだかわからないほつが、かえってよけいな感情がわいてこなくてすむのが救いであった。

解剖が始まった。今日は、胃から小腸にかけての学習である。まず、腹部を開き、臓器を丁寧に取出す。教授の解説を聞きながら、さらにその内部の様子を丹念に見ていく。そして、縫合して臓器をもとに戻す……。それは、まるで、厳かな儀式のようで、僕たちは最初から最後まで無言だった。

実習は予定どおりに進み、最後に腹部を縫合し、全身を布で巻いて、五三二番の札をつけ、シートをかけて終了した。死体はといつと、専門の技師によってアルコールのプールにつけられ、次の実習まで、そこに保管されるのだという。

その日、僕はひどく疲れていた。そのくせ、どこか神経が高ぶっていて、深夜になってもなかなか寝付けなかったのをおぼえている。

その日以来、実習はほとんど毎週行われた。内臓が一通りすむと、脳や眼球、筋肉、骨、神経など、人間の肉体のあらゆる部分を学習することになっていったからである。

一ヶ月を過ぎると、僕たちは実習に慣れ、臓器の状態について、意見を交換しあいながら解剖をすすめるようになった。そのころから、輪番で、最後の縫合や片づけを一人で受け持つようにもなり、午後

の講義のあとなど、「今日の五三二番の件だけだ……。」と、だれからともなく切り出すと、「もつ少し浅く切らないと神経があるからな。」とか、「もっと早く縫合できたんじゃないのか。」とか、自分たちの技術について、議論が続くこともしばしばだった。

そして三ヶ月がたち、人体解剖の実習は終了した。

最後の日の片づけは、僕の番だった。教授やグループのみんなが引き上げたあとの実習室は、やけに広く感じられた。改めて見渡すと、なんとも殺風景な部屋である。冬の冷たい空気の中で、僕は、死体に布を巻き付けていった。頭、顔、首、肩、胸部……。そして、肩先から腕へ……。

その時、僕は、目を見開いた。見たのだ。死体の左手の薬指に、うっすらと残された白いあとを。思わず死体の手をとって、僕は顔を近づけた。そして、もう一度よく見た。(間違いない。指輪のあとだ。)

気づいたとたん、急に、僕の脳裏にさまざまな思いが浮かんできた。(この人、結婚していたんだ……。奥さんは、どんなに悲しんだことか。この若さじゃ、子どもさんだってまだ幼いだろうに……。事故だったのですか。病気がったのですか。家族をのこして、どうしてあなたは死んだのですか……。)(胸が苦しくなって、鼻の奥がツーンと痛くなった。硬く、ぬくもりのない遺体の手を握りながら、僕は、あふれてくる涙を止めることができなかった。

実習室に、嗚咽の声だけが静かに響いた。僕は、遺体を布で巻きながら(何でだよ、何でなんだよ。)(と、心の中で繰り返し叫んでいた。この三ヶ月、指輪のあとに気づかなかった自分がはがゆかった。今までの出来事が、ものすごいスピードで、僕の頭の中を、いや、全身を駆けめぐっている。心臓の高鳴りを鎮めるかのようじ、僕は、ゆっくりと布を巻き続けるしかなかった。

そして、布を巻き終えると、静かにシーツをかぶせた。札は、解剖台の上に置いた。

僕は、黙祷を捧げ、深々とお辞儀をして実習室を出ていった。

《後半》

あれから二十年がたち、僕は、あの遺体の男性と同じ年ごろになった。仕事柄、多くの患者さんとの出会いがあり、また、いやおうない別れもあった。何年経験を積んでも、「死」と向き合つのは、本当に厳しく、辛いことである。そのたびごとに感情に流されていては、医者として仕事にならない。

しかし、あの日、自分の体中を駆けめぐった熱い思いだけは、一日たりとも忘れたことはない。あの激しい感情は、一体何だったのか。初めて人体解剖をしたとき感じた「死」に対する畏れの気持ちや緊張感を、いつの間にか忘れていた自分。一人の人間の人生や生きざまに心寄せることなく、医者になった気分で解剖技術を議論しあっていた若い日の自分。そんな自分への腹立たしさや情けなさが、涙となつて一時に僕を責め立てたのかもしれない。

いずれにせよ、あの指輪の白いあとが、僕の脳裏から消えることはないだろう。なぜなら、あの白い記憶こそが、医者となる僕に教えてくれたのだ。「死」とは「生」の対極にあるものではなく、その人の生命、あるいは生き方や人生の一部であるということ。」「死」と向き合つていくことは、その人の生き方を受け入れ、尊重することだ。

活用に生かすための実践報告

白い記憶

1 主題の設定

これまで、「生命尊重」を主題として授業を組み立てるとき、かけがえのない生命をいとおしむ気持ちに焦点を当てて構成するよう心がけてきた。特に神戸の少年事件以来、日常の人間関係の中で、自分を生かし、他を尊重して「生きる」ことの実感を、どのように生徒たちに味わわせるかが、私の中で大きな課題となっていた。

この事件以降、さまざまな少年問題が報じられるたびに、中学生の「生命」に対する畏敬の念の希薄さとともに、「死」に対する畏れのなさもクローズアップされた感がある。

私たちは、自身の生活が平穏無事であることを願いつつも、その道のりが平坦であればあるほど、「生きる」ことの自覚を抱く機会が少ないのではないだろうか。

したがって、道徳の授業の中に、間接的に生死の境をさまようような状況や、人間の死に直面するような場面を設定し、「生」と「死」とを見つめる中で、努めて「生きる」ことの意味を問うていくことが必要だと思われる。

2 指導過程の工夫

ことばが難しいので、範読が望ましい。資料について質問があれば、的がそれない程度に内容をかみくだいて説明したり、場面が想起しやすい語りを入れてから発問したりするとよい。考える時間、感じ取る時間を確保しつつ、意見が出にくい場合は、積極的に指名して尋ねてみるのも一つの方法である。

「死」と対峙しながら、どう「生き方」を模索するのか、終末部では、自分や周囲の友だち、家族等の生き方に立ち返って考えられるようにしたい。

3 発問の工夫

題名にもなっている、「白い記憶」(遺体の指輪のあと)が、主人公の生き方にどうつながったのかが中心発問となる。指輪のあとに気付かなかっただら、主人公がどんな医者になっていたのか、その姿(私利私欲にはしる、相手の気持ちを考えない、生命を軽んじる、結果だけを重視する、そんな生き方)を自分の生き方と照らし合わせて考えられるかどうかが鍵である。実際に授業をしてみると、資料を読む際、涙ぐむ生徒が多かったことから、今後、主人公の流した「涙」と、自分たちの「涙」とについて、その意味を問う発問を工夫する余地を残した。

4 生徒の反応(授業後の感想)

遺体をモチーフにした重いテーマのためか、資料を読み始めると、それまでの導入での和やかな雰囲気が一変し、教室が水をうったような静けさに包まれた。全体的に、活発に議論し合うというよりは、主題が、一人一人の胸の中にゆっくりとしみていく感じだった。中には、本資料を一つの媒体として、肉親が亡くなったときの体験を語ったり、最近の医療事故のニュースを挙げて意見を述べたりすることで、主題の価値を追求したクラスもあった。

5 実践者からの一言

本資料は、生徒にとって「非日常」の世界の出来事である。それをどれだけ「日常」の生き方に引きつけて考えられるか。それは、導入でたくさん挙げられた「生」に関するささやかな実感に、生徒自身がどれだけ生きている価値を見いだせるか、ということでもある。

授業後の感想を、学級通信等で紹介したり、一言コメントを掲示したりすることで、生徒自身の「日常」へ返していきたい。

(城山中学校 湯田明美)